

個 別 の 人 権 課 題		外 国 人	
校 種	高等学校	本時に関わる 3つの側面	知 識 的 側 面 <input checked="" type="radio"/>
対 象 学 年 等	第3学年		価 値 的 ・ 態 度 的 側 面 <input checked="" type="radio"/>
教 科 等	倫理		技 能 的 側 面 <input type="radio"/>
单 元 名	文化と宗教の課題		

1 単元の目標及び計画

(1) 単元の目標

先哲の思想を手掛かりとして、様々な文化や宗教の尊重と共存の在り方を探求するとともに、他の倫理的課題との関連を踏まえながら、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深める。

(2) 単元の計画

- 1次・・・グローバル化と多文化状況
- 2次・・・多文化の共生に向けて（本時を含む）

2 学習指導要領等の該当箇所

高等学校学習指導要領・第2章・第3節 公民・第2 倫理

2 内 容

(3) 現代と倫理

イ 現代の諸課題と倫理
生命、環境、家族、地域社会、情報社会、文化と宗教、国際平和と人類の福祉などにおける倫理的課題を自己の課題とつなげて探究する活動を通して、論理的思考力や表現力を身に付けさせるとともに、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。

3 内容の取扱い

(2,) 内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

ウ 内容の(3)については、次の事項に留意すること。

(イ) イについては、アの学習を基礎として、学校や生徒の実態等に応じて課題を選択し、主体的に探究する学習を行うよう工夫すること。その際、イに示された倫理的課題が相互に関連していることを踏まえて、学習が効果的に展開するよう留意するとともに、論述したり討論したりするなどの活動を通して、自己の確立を促すよう留意すること。

3 本時の目標

様々な文化や宗教を尊重することに関連する先哲の思想の特色を理解するとともに、それらの思想を手掛かりとして、多文化の共生の在り方について考察し、表現する。

4 人権教育との関わり

この単元では、現代の諸課題の一つである文化と宗教の課題について学習する中で、個別の人権課題の一つである「外国人」に関連する内容を取り扱います。具体的には、文化や宗教の尊重に関する先哲の思想としてクロード・レヴィ=ストロースやエドワード・サイードを取り上げ、文化相対主義やオリエンタリズム批判などの思想の特色を理解できるようになるとともに、それらの思想を手掛かりとして、自文化中心の考え方陷入ことなく、異なる文化や習慣、価値観をもった人々を理解し、共存できる社会の在り方について考え、表現できるようにすることを大切にしています。

5 本時で育てたい3つの側面

知 識 的 側 面	人権の発展、人権侵害等に関する歴史や現状に関する知識
価 値 的 ・ 態 度 的 側 面	多様性に対する開かれた心と肯定的評価
技 能 的 側 面	人間関係のゆがみ、ステレオタイプ、偏見、差別を見きわめる技能

6 本時の学習過程

学習過程等	人権教育との関わり等	資料等
<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容を確認する。 グローバル化により多文化状況が進展する中で、異なる文化や宗教が出会う機会も増加し、紛争等が起こっている。 <p>【課題】様々な文化や宗教の共存について、先哲はどのように考えたのかを理解し、その思想を手掛かりとして自分の考えをまとめて表現しよう。</p>		
<p>■学習活動</p> <p>【レヴィ=ストロースは文化や宗教の共存について、どのように考え、何を主張したのだろう。】</p> <ul style="list-style-type: none"> フランスの人類学者であるレヴィ=ストロースは、構造主義の考え方を未開社会の親族関係や神話の分析に応用し、人の行為は、本人の意識を超えて社会全体の構造やシステムが規定していることを指摘した。 南米の諸部族の実地調査を行う中で、動物や植物を象徴として使う一定の規則に基づいた厳密な思考方法を未開社会の人々がもっていることを発見し、「野生の思考」と呼んだ。 数字や観念を使う抽象的で科学的な西洋の「文明の思考」と「野生の思考」は原理的に同じであると主張した。 人の文化は「未開」から「文明」へと直線的に進化する、という西洋近代中心の文明観を覆し、文化間に優劣はないとする文化相対主義を主張した。 	<p>【技能的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 人間関係のゆがみ、ステレオタイプ、偏見、差別を見きわめる技能 <p>【指導上のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分でも気付かないうちにステレオタイプなものの見方をしている可能性があることに触れ、自分のものの見方や考え方を常に吟味することが大切であることに気付かせる。 	○資料「野生の思考(抜粋)」レヴィ=ストロース
<p>■学習活動</p> <p>【サイードは文化や宗教の共存について、どのように考え、何を主張したのだろう。】</p> <ul style="list-style-type: none"> パレスチナ出身でアメリカの文芸評論家サイードは、近代西洋社会は「東洋」を後進的で野蛮な存在であると見なすことで、自分たちが先進的で文明化されているという自己像をつくり上げたと主張し、このような思考様式をオリエンタリズムと呼び、人種差別主義と結びつくことで西洋の植民地支配を正当化する役割を果たしたことを指摘した。 このようなサイードの指摘は、西洋と東洋だけではなく、あらゆる民族が他の民族に対してもつ偏見や自民族中心主義に通じるものである。 サイードの主張は1980年代以降のポスト植民地主義の諸思想に大きな影響を与えた。 <p>【まとめ】レヴィ=ストロースやサイードは、西洋社会には東洋や未開社会に対する優越意識につながる無自覚な偏見が隠れていることを指摘し、西洋文明中心の考え方を批判するとともに、文化相対主義の重要性を主張した。</p>	<p>【知識的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 人権の発展、人権侵害等に関する歴史や現状に関する知識 <p>【指導上のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 旧植民地と旧宗主国との間には、未だに過去の植民地支配の影響が残っており、偏見や差別につながっていることに気付かせる。 	○資料「オリエンタリズム(抜粋)」サイード
<p>■学習活動(ペア→個人)</p> <p>【私たちの身近にも、2人の思想家が指摘した内容に類似した状況や事例は見られないか考えてみよう。】</p> <p>【学んだ考え方を手掛かりとして、異なる文化や宗教、価値観をもつ人々と共存していくために必要なことを考え、小論文のかたちでまとめよう。】</p>	<p>【価値的・態度的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様性に対する開かれた心と肯定的評価 <p>【指導上のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 異なる文化や価値観にそれぞれ固有の価値を認め、同化させるのではなく差異を保ちながら共生していくことが大切であることについて理解を深めさせる。 	